

## 日本語の複数表現 ——「それらの＋名詞」と畳語名詞——

小早川 暁

### 〈キーワード〉

①「それらの＋名詞」 ②畳語名詞 ③認知意味論 ④カテゴリー化 ⑤スキーマ

### 〈論文要旨〉

本稿では、日本語の複数表現として「それらの＋名詞」と畳語名詞をとりあげ、次の3つの問いを中心に議論を展開する。①「それらの＋名詞」はどうして合計を表わす表現と共起しにくいのか。②畳語名詞はどうして合計を表わす表現と共起しにくいのか。③畳語名詞はどうして総称文の主語になりにくいのか。ここでは、「それらの＋名詞」と畳語名詞の共通のスキーマを抽出することにより、この3つの問いに対して統一的な答えを与える。

## Plurality in Japanese

Satoru KOBAYAKAWA

### 〈Key Words〉

①*sore-ra no N* ②reduplicative noun ③cognitive semantics ④categorization ⑤schema

### 〈Abstract〉

This paper deals with the issue of plurality in Japanese from the standpoint of cognitive semantics. It is often noted that nouns in Japanese are neutral as to the distinction between singular and plural, and that the unmarked form of a noun, when it refers to more than one entity, is interchangeable with the marked form which explicitly expresses plurality. In this paper, however, it is shown that such generalizations are inadequate. In particular, this paper examines the use and function of marked plural forms, *sore-ra no N* (e.g. *sore-ra no pen* 'those pens') and reduplicative nouns (e.g. *hana-bana* 'flowers'), comparing them with those of unmarked forms (e.g. *sono pen* 'that pen' and *hana* 'flower'). It is argued that *sore-ra no N* and reduplicative nouns refer to things of different kinds which are construed as belonging to the same category. This schematic characterization gives a unified account of their apparently complicated distributional patterns.

## 日本語の複数表現 ——「それらの＋名詞」と畳語名詞——

小早川 暁

### 1. はじめに

本稿の目的は、「それらの＋名詞」と畳語名詞がもついくつかの文法的特徴を認知意味論的観点から統一的に説明することである。具体的には、(1a)と(1b)の文間の関係、(2a)と(2b)の文間の関係、(1b)と(2b)の文間の関係などについて論じる。

- (1) a. 太郎はそのペンを買った。  
b. 太郎はそれらのペンを買った。
- (2) a. 太郎は(春の)花を買った。  
b. 太郎は(春の)花々を買った。

一見すると、日本語の「それらの＋名詞」や畳語名詞は、英語の複数接辞(-e)sをとともなう複数形(たとえば, pens)と同じように、複数を表わす有標形式であるように思われる。しかしながら、実際は、「それらのペン」や「花々」は、「そのペン」や「花」とは違い、「5本」などの複数を表わす数詞とは共起しにくい。次の文が示すとおりである。(一方、いうまでもなく、英語のfive pensは適格である。)

- (3) a. 太郎はそのペンを5本買った。  
b. ??太郎はそれらのペンを5本買った。<sup>1)</sup>
- (4) a. 太郎は(春の)花を5本買った。  
b. ?\*太郎は(春の)花々を5本買った。

この事実は、日本語の複数を表わす有標形式が英語の複数形とは異なるということを示すものである。

また、以下の対照例が示すように、畳語名詞「花々」は総称文の主語になりにくい。これは、英語のはだか複数名詞(flowers)が総称文の主語として使えるのとは対照的である。

- (5) a. 花は人の心をなごませる(ものだ)。  
b. ??花々は人の心をなごませる(ものだ)。

以上の事実観察から、少なくとも3つの問いがたてられる。

- (6) a. 「それらのペン」はどうして「5本」と共起しにくいのか。  
b. 「花々」はどうして「5本」と共起しにくいのか。

1) 文頭の記号は、その文の容認度を表わす。ここでは、?, ??, ?\*, \*の4種類を用いている。左から右にゆくにしたがって、容認度が下がってゆくことを

表わす。なにも記号がついていない文は適格と判断される文である。

c. 「花々」はどうして総称文の主語になりにくいのか。

このような問いに対してとりうる立場には少なくとも2つある。第1に、この3つの問いに対してそれぞれ別の答えを与えるという立場がある。これは、個別論を重視する立場である。第2に、この3つの問いに対して1つの答えを与えるという立場がある。ここでは、第2の立場をとり、「それらの+名詞」と豊語名詞の共通のスキーマを明らかにすることにより、(6a-c)の問いに対して統一的な答えを与えるを試みたい。<sup>2)</sup>

## 2. 合計を表わす表現

この節では、合計を表わす表現「5本」の性質について論じる。<sup>3)</sup> 問題となるのは、次のような対照例である。

(7) a. 太郎はペンを5本買った。

b. ?\*太郎はフェルトペンとボールペンを5本買った。

(7a)の文は太郎がフェルトペンを2本とボールペンを3本買ったという状況を指す文として適格だが、(7b)の文はそのような状況を指す文としては容認しにくい。(なお、「5本」がボールペンの数を表わす解釈は可能だが、ここではそのような解釈は問題にしない。)つまり、「5本」が合計を表わす解釈のもとでは、2つの文の間に容認度の差があるのである。<sup>4)</sup> このような差がどうして生じるのかを明らかにするのがこの節の目的である。そして、ここで得られた結論にもとづいて、次節以降の議論を展開したい。

(7a, b)の対は最小対立例であり、2つの文の違いは目的語(「ペン」か「フェルトペンとボールペン」か)にある。(7a, b)の文から合計を表わす表現「5本」をとると、次に示すように、どちらの文も適格になる。

(8) a. 太郎はペンを買った。

b. 太郎はフェルトペンとボールペンを買った。

したがって、2つの文の間の容認度の差は、「5本」と共起しているのが「ペン」であるか、「フェルトペンとボールペン」であるかの違いによると考えられる。そして、「5本」は「ペン」は修飾できるが、「フェルトペンとボールペン」は修飾できないといえる。

それでは、「ペン」と「フェルトペンとボールペン」には文法的にどのような違いがあるのだろうか。統語論的には、等位接続された名詞(句)か否かという違いがある。意味論的には、次のような違いがある。表現対象としてのフェルトペンとボールペンが「ペン」と表現された

2) 念のため述べておくと、第1の立場と第2の立場は相反するものではない。第3の立場として、その2つを統合する立場がある。個別論と一般論の統合、周辺の現象と中心的現象の橋渡し(さらには、共時的現象と通時的現象の橋渡し)を可能にする接近法が使用依拠モデル(usage-based model)である(Barlow and Kemmer (2000))。本稿は、そのような立場にたつ研究の準備段階のものである。

3) この節の内容は、小早川(2001)の主要な論点をま

とめたものである。一見すると問題となるような例も含めた詳しい議論はそちらを参照されたい。

4) なお、数詞の位置が変わっても事情は変わらない。「太郎は5本のペンを買った」「太郎はペン5本を買った」は適格だが、「?\*太郎は5本のフェルトペンとボールペンを買った」「?\*太郎はフェルトペンとボールペン5本を買った」は合計解釈のもとでは容認しにくい。

ときには、フェルトペンとボールペンの違いは捨象され、同じカテゴリー（すなわち、ペン）に属すものとして把握されているといえる。<sup>5)</sup>（ここでは、事物の把握の仕方が意味構築に大きく関わると考える認知意味論の立場をとっている。<sup>6)</sup>）それに対して、「フェルトペンとボールペン」と表現されたときには、両者はそれぞれ異なるカテゴリー（すなわち、フェルトペンとボールペン）に属すものとして把握されているといえる。つまり、(8a) では同じカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものが表わされており、(8b) では異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものが表わされている。

以上の議論にもとづくと、合計を表わす表現「5本」が「ペン」は修飾できるが「フェルトペンとボールペン」は修飾できないという事実観察（(7a) の文の容認度は高いが、(7b) の文の容認度は低いという事実観察）は、次のように一般化できる。

- (9) 同じカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものの合計を表わすことはできるが、異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものの合計を表わすことはできない。

この言語学的一般化は、あるものの数を数えるためには、数える対象となるものが同じ種類のもの（同じカテゴリーに属すもの）として把握されていなければならないという認知論的一般化により動機づけられるものである（Bateson (1972: 24-25), Wierzbicka (1988: 512-514), Croft (1994: 162)）。<sup>7)</sup>

以下では、この合計を表わす表現に関する一般化をたよりに「それらの+名詞」と畳語名詞について論じてゆく。

### 3. 「それらの+名詞」

この節では、「その+名詞」と「それらの+名詞」を比較しながら、「それらの+名詞」が表わす複数の特徴について明らかにする。手始めに、次の文を観察してみよう。

- (10) a. 太郎はそのペンを買った。  
b. 太郎はそれらのペンを買った。

一見すると、「そのペン」は単数を表わし、「それらのペン」は複数を表わすと感じられる。たとえば、『大辞林』（第2版）や『大辞泉』などにも「それら」は「それ」の複数（形）、「これら」は「これ」の複数（形）というような記述がみられる。そして、実際、「そのペン」「それらのペン」が単数を表わす数詞「1本」と共起するか否かを調べてみると、予想通りの結果が得られる。

5) ここには、スキーマ抽出の能力、カテゴリー化の能力が関与している。

6) 認知意味論では、言語表現の意味には表現主体が表現対象をどのように把握するか（たとえば、どこに焦点をあてるか、どの程度詳しく捉えるか、どのような視点から捉えるかなど）というような主体的な要因が慣習化されたかたちで組み込まれていると考えている（Langacker (1987, 1991), 中右 (1994,

1998), 西村 (1998)）。

7) 数の理解に関する認知心理学的研究の概説は吉田 (1991) や吉田・多鹿 (1995) で知ることができる。先駆的な研究として重要なのは Gelman and Gallistel (1978) である。認知言語学の観点（とりわけ、身体性 (embodiment) と概念メタファー (conceptual metaphor) の観点）からの最近の研究としては Lakoff and Núñez (2000) があげられる。

(11) a. 太郎はそのペンを1本買った。

b. \*太郎はそれらのペンを1本買った。

単数を表わすと思われる「そのペン」は「1本」と共起するが、複数を表わすと思われる「それらのペン」は「1本」とは共起しない。(英語でも \*one pensは不適格である。)

(10)の文や(11)の文を観察するかぎりには、「そのペン」は単数を表わし、「それらのペン」は複数を表わすと考えてよいであろう。しかしながら、観察の範囲をひろげてみると、そのように単純に考えてはならないことがわかる。次の文を観察しよう。

(12) a. 太郎はそのペンを5本買った。

b. ??太郎はそれらのペンを5本買った。

(12)の文は、(10)の文に合計を表わす表現「5本」を加えたものである。(12a)の文は適格で、「5本」が「そのペン」を修飾する解釈が可能である。<sup>8)</sup>したがって、「そのペン」がつねに単数を表わすわけではないといえる。(英語の単数形penをfiveが修飾することはない。)一方、(12b)の文は容認度が低く、「5本」が「それらのペン」を修飾する解釈は得にくい。

この事実観察と合計を表わす表現「5本」に関して得られた結論(すなわち、(9))をたよりに「その+名詞」と「それらの+名詞」の性質について推測すると次のようになる。

(13) 「その+名詞」は同じカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものを表わし、「それらの+名詞」は異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものを表わす。

ここで、合計を表わす表現「5本」と関連する表現として、内訳を表わす表現「それぞれ5本」を取りあげよう。興味深いことに、次の(14a, b)の文の「5本」を「それぞれ5本」と置き換えると、(15a, b)の文が示すように、ちょうど対照的な結果が得られる。

(14) a. 太郎はペンを5本買った。

b. \*太郎はフェルトペンとボールペンを5本買った。

(15) a. ??太郎はペンをそれぞれ5本買った。

b. 太郎はフェルトペンとボールペンをそれぞれ5本買った。

「それぞれ5本」は「ペン」は修飾できないが「フェルトペンとボールペン」は修飾できる。これは、「5本」が「ペン」は修飾できるが「フェルトペンとボールペン」は修飾できないという事実と対照的である。したがって、2節での「ペン」と「フェルトペンとボールペン」に関する議論をふまえると、「それぞれ5本」に関しては次のようにいえる。

(16) 「それぞれ5本」は同じカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものを表

8) ただし、このような解釈ができるのは、「その+名詞」に現われる名詞が人間以外のものを表わす名詞の場合だけである。人間を表わす名詞の場合には、数詞が「その+名詞」を修飾する解釈はできない

(Kaga (1991), 仁田 (1997))。たとえば、「\*太郎はその|人/先生|を|1人/5人|尊敬している」という文は不適格である。

わす語句は修飾できないが、<sup>9)</sup>異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものを表わす語句は修飾できる。

ここで、あるものが同じカテゴリーに属するか否かという点について補足しておかなければならない。あるものがどういうカテゴリーに属すかは、そのものが内在的にもつ本質的だと思われる性質のみによって客観的、一義的に決まるのではない。一見すると非本質的だと思われる性質、そのものを取りまく状況（たとえば、文化的状況や社会的状況など）、表現主体の主体的な把握の仕方などもカテゴリー化にあたって大きな役割をはたしている。客観的には異なる2つのものも、状況によって、同じものと把握されたり、異なるものと把握されたりするのである。

たとえば、就学前のアフリカ系アメリカ人の子どもにとっては、肌の色が人種の同定に影響を与えるという報告が Clark and Clark (1940) によって行なわれている。あるものをカテゴリー化する際に、そのものがもつ色は重要な要因となるといってよいであろう。認知論的には、次のようにいえる。

(17) 異なる色の個体は異なるカテゴリーに属す（別種のもの）と把握される場合がある。

このように考えると、「フェルトペンとボールペン」について行なったのと同じ議論を「赤ペンと青ペン」についても行なえる。たとえば、表現対象としての赤ペンと青ペンが「ペン」と表現されたときには、赤ペンと青ペンの色の違い（正確には、インクの色の違い）は捨象され、同じカテゴリーに属すもの（すなわち、同じ（種類）のペン）として把握されているといえる。それに対して、「赤ペンと青ペン」と表現されたときには、色の違いが問題となっており（あるいは、前景化されており）、両者はそれぞれ異なるカテゴリー（赤ペンと青ペン）に属すもの（すなわち、異なる種類のペン）として把握されているといえる。<sup>10)</sup>

そうすると、「赤ペンと青ペン」は（「フェルトペンとボールペン」と同じように）「それぞれ5本」によって修飾できるはずである。それに対して、同じ色のペン（たとえば、赤ペン）しかない場合には、たとえそれが複数本あっても、「それぞれ5本」によっては修飾できないはずである。実際、この予測は正しいものである。

(18) a. ?\*太郎は赤ペン（数本）をそれぞれ5本買った。

b. 太郎は赤ペンと青ペンをそれぞれ5本買った。

ここまでの例を観察すると、「それぞれ5本」は等位接続された名詞（「フェルトペンとボールペン」や「赤ペンと青ペン」）は修飾できるが、等位接続されていない名詞（「ペン」や「赤

9) (15a) の文の目的語「ペン」を「同じペン」にかえて「?\*太郎は同じペンをそれぞれ5本買った」とするとさらに容認度が低くなる。この事実もここでの一般化の裏づけとなるであろう。（なお、「太郎は同じようなペンをそれぞれ5本買った」という文は適格である。）

10) 筆記用具をカテゴリー化する際には、インクの色（芯の色）はとりわけ重要な要因となる。インクの色（芯の色）は筆記用具の用途を規定することさえある。何色で書くかは自由ではなく、場面・状況によって、使うべき色（使うのが望ましいとされる色）

は慣習的に決められている。たとえば、履歴書などは黒のペンで記入することが通例であり、赤ペンで記入することはない。試験の採点であれば、赤ペンを用いることが多く、黒のペンを用いることはまれである。履歴書を赤ペンで記入することは、鉛筆で記入するのと同程度に普通でないと判断される。このような状況においては、黒のペンと赤ペンの違いは、ペンと鉛筆の違いに相当するといえるであろう。インクの色（芯の色）の違いはカテゴリーの違いとして把握されるのである。

ペン」)は修飾できないように見える。しかしながら、実際は、等位接続された名詞か否かという統語論的観点からは、「それぞれ5本」の特徴(「それぞれ5本」がどのような要素を修飾できるか)を十分に捉えることはできない。第1に、等位接続された名詞であっても不適格になる場合があるし、第2に、等位接続されていない名詞であっても適格になる場合があるからである。

以下にあげる例は、等位接続された名詞が「それぞれ5本」によって修飾されているという点ではどれも同じだが(つまり、統語構造はどれも同じだが)、容認度は高いものからかなり低いものまでさまざまである。

- (19) a. 太郎は赤ペンと {青ペン/シャープペンシル/鉛筆} をそれぞれ5本買った。  
 b. ?太郎は赤ペンと {カセットテープ/ビデオテープ} をそれぞれ5本買った。  
 c. ?\*太郎は赤ペンと {金属バット/釣りざお/缶ビール/傘} をそれぞれ5本買った。  
 d. \*太郎は赤ペンと赤ペンをそれぞれ5本買った。

(19a)の文が適格で、(19d)の文が不適格であるという事実は、(16, 17)の一般化により捉えることができる。((19a)では異なるカテゴリーに属す個体が表わされており、(19d)では同じカテゴリーに属す個体が表わされている。)しかしながら、(19a-c)の間の容認度の差は、(16, 17)の一般化では説明できない。いずれの文においても、異なるカテゴリーに属す個体の集合体が表わされているという点では違いがないからである。この問題については以下で扱う。

また、等位接続された名詞でなくても適格な例がある。以下にあげる例のbの文がそれにあたる。(aの文は、等位接続されていない名詞で不適格な例である。)

- (20) a. \*太郎は同じ色のペンをそれぞれ5本買った。  
 b. 太郎は異なる色のペンをそれぞれ5本買った。  
 (21) a. \*太郎は同じ種類のペンをそれぞれ5本買った。  
 b. 太郎は異なる種類のペンをそれぞれ5本買った。

上の文で「それぞれ5本」によって修飾可能なのは「異なる色のペン」と「異なる種類のペン」である。いずれも等位接続された名詞ではないが、意味論的には異なるカテゴリーに属す個体の集合体(異なる種類のものからなる集合体)を表わしている。より詳しく述べると、ペンという類に属す別種の個体の集合体(ペンという上位カテゴリーの複数の異なる下位カテゴリーに属す成員の集合体)を表わしている。(ここでは、色の違いはカテゴリーの違い、種の違いと考えている。)

以上の観察を考慮に入れると、「それぞれ5本」については次のように考えなければならない。

- (22) 「それぞれ5本」は同じ類に属す個体からなる集合体として把握されたものを表わす語句は修飾できないが、同じ類に属す別種の個体からなる集合体として把握されたものを表わす語句は修飾できる。

この一般化の前半部分は(16)の一般化の前半部分と実質的に同じものだが、後半部分は(19-21)の例にもとづき改めたものである。このように改めることにより、(16, 17)の一般

化では説明できなかった(19a-c)の間の容認度の差を説明できるようになる。(19a)に比べて(19b)や(19c)の容認度が低いのは、たとえば、「赤ペンとカセットテープ」「赤ペンと金属バット」などは別種の個体の集合体を表わしてはいるが、「赤ペンと青ペン」に比べると同じ類に属す(ものを表わす)という把握がしにくいからである。((19b)の文と(19c)の文の間の容認度の差も、同じ類に属すという把握のしやすさの違いによると説明できる。)

ここで、「そのペン」「それらのペン」と「それぞれ5本」を組み合わせよう。結果は(23)のようになる。

(23) a. ?\*太郎はそのペンをそれぞれ5本買った。

b. 太郎はそれらのペンをそれぞれ5本買った。

(24) a. 太郎はそのペンを5本買った。

b. ??太郎はそれらのペンを5本買った。

合計を表わす表現「5本」と組み合わせた場合(すなわち、(24))とは対照的に、(23)ではaの容認度が低く、bの容認度が高い。「それぞれ5本」に関して得られた(22)の一般化によると、「そのペン」「それらのペン」については次のように考えなおすことになる。

(25) 「その+名詞」は同じ類に属す個体からなる集合体として把握されたものを表わし、  
「それらの+名詞」は同じ類に属す別種の個体からなる集合体として把握されたものを表わす。

(13)の一般化との違いはやはり後半部分にある。敷衍すると次のようになる。「それらの+名詞」は単に異なるカテゴリーに属す個体からなる集合体として把握されたものを表わすだけでなく、それと同時に、その集合体を構成する(複数の)個体が共通の上位カテゴリーに属すものであることを表わすのである。(その共通の上位カテゴリーは、「それらの」に続く名詞によって表わされている。)たとえば、「それらのペン」であれば、ペンという上位カテゴリー(類)を表わすとともに、そのカテゴリーの複数の異なる下位カテゴリー(種)の成員からなる集合体(たとえば、フェルトペンやボールペンからなる集合体)を表わすのである。

「その+名詞」と「それらの+名詞」に関する(25)の一般化の妥当性は、明示的に先行詞が現われている次のような例によっても確認できる。

(26) a. 太郎はペンを2本買った。しかし、{そのペン/?\*それらのペン}はあまりよく書けなかった。

b. 太郎は {フェルトペンとボールペン/赤ペンと青ペン} を買った。しかし、{そのペン/それらのペン} はあまりよく書けなかった。

(26a)が示すように、「ペン(を2本)」(同じカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものを表わす)は「そのペン」でうけることができるが、「それらのペン」でうけることは難しい。(26b)においては、「フェルトペンとボールペン」「赤ペンと青ペン」(異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものを表わす)を先行詞とする照応が、「そのペン」と「それらのペン」の両方で可能となっている。「それらのペン」が可能であるという事実はここでの一般化により捉えられるが、「そのペン」については問題がのこる。ここでは、いっ



たん異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものが、同じカテゴリー（すなわち、共通の上位カテゴリー）に属す個体の集合体として把握しなおされていると考えたい。（ここではスキーマ化が行なわれている。）<sup>11)</sup>

ここで、(25) の一般化の利点をあげておこう。この一般化によると、次のような段階性をもつデータが説明できる。

- (27) a. 太郎はそれらのペンを買った。  
 b. ?太郎はそれらの {ボールペン／蛍光ペン／筆ペン／赤ペン} を買った。  
 c. ??太郎はそれらの {3色ボールペン／油性ボールペン／ゲルインクボールペン} を買った。  
 d. ?\*太郎はそれらのゼブラの3色ボールペンを買った。

(27) では a から d にゆくにしがって次第に容認度が低くなってゆく。(25) の一般化によると、「それらの+名詞」は「それらの」に続く名詞が表わすカテゴリーの複数の異なる下位カテゴリーに属す成員からなる集合体を表わすのであった。(27a-d) の容認度の差は、「それらの」に続く名詞が表わすカテゴリーの下位カテゴリーを想起することができるか否かと相関している。たとえば、(27b) の文の容認度が (27a) の文に比べて低くなるのは、ボールペンの下位カテゴリーを想起することがペンに比べて難しくなるからである。その難しさの程度は、3色ボールペン、ゼブラの3色ボールペンとなるにしたがって次第に増してゆく。そのため、(27a) から (27d) にゆくにしがって容認度が低くなるのである。以上の説明は、次のパラダイムによっても確かめられる。

- (28) a. 太郎は異なる種類のペンを買った。  
 b. ?太郎は異なる種類の {ボールペン／蛍光ペン／筆ペン／赤ペン} を買った。  
 c. ??太郎は異なる種類の {3色ボールペン／油性ボールペン／ゲルインクボールペン} を買った。  
 d. ?\*太郎は異なる種類のゼブラの3色ボールペンを買った。

最後に、「その」「それらの」という連体詞（指示詞）と関連する問題として「それ」「それら」という代名詞についてみておこう。ここでの分析は、「それ」「それら」の分布も適切に捉えることができる。つまり、ここでの分析は、2つの品詞にまたがる一般性をもつものであるといえる。

- (29) a. 太郎は千代紙を（何枚か）買ってきた。そして、{それ／?\*それら} を短冊に切っておいた。  
 b. 太郎は京千代紙と江戸千代紙を（何枚か）買ってきた。そして、{それ／それ

11) しかしながら、そうすると、どうして (26a) において「それらのペン」の容認度が低いのか、すなわち、同じカテゴリーに属す個体の集合体として把握したものを異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握しなおすことができないのはなぜかという

問題がのこることになるが、ここではこの問題には立ち入らず、非対称性を指摘しておくにとどめたい。（この点については、「それらの+名詞」の有標性を考慮に入れる必要があるだろうとのご指摘を坪井栄治郎氏よりいただいた。）

ら」を短冊に切っておいた。

(29a, b)における代名詞の分布は、(26a, b)における連体詞の分布と平行的である。したがって、「それ」は同じ類に属す個体の集合体として把握されたものを表わし、「それら」は同じ類に属す別種の個体の集合体として把握されたものを表わすと考えられる。((29b)においても、異なるカテゴリーに属す個体の集合体(京千代紙と江戸千代紙)として把握されたものを「それ」でうけることが可能になっている。)

なお、「それ」と「それら」については、山梨(1995: 127)が、本稿とは異なる観点から次のような一般化を行なっている。

- (30) 単数形の代名詞の「それ」が使われる場合は〈統合的スキーマ〉に基づく認知作用が働く場合、複数形の代名詞の「それら」が使われる場合は〈離散的スキーマ〉に基づく認知作用が働く場合として、これらの代名詞の相補的な分布を一般的に予測していくことが可能となる。

統合的スキーマとは、集合体をひとまとまりのものとして把握する認知作用のことであり、離散的スキーマとは、集合体を構成する個々の個体に焦点をあてる認知作用のことである。そうすると、(30)の一般化によれば、「それ」はひとまとまりの集合体を表わし、「それら」は個別化された集合体を表わすことになる。

最後に、山梨の一般化と本稿の一般化の間の関連について述べておこう。認知論的には次のような傾向があるといつてよいであろう。

- (31) 同じ類に属す個体からなる集合体として把握されたものは、ひとまとまりのものとして把握されやすく、別種の個体からなる集合体として把握されたものは、個性に焦点があてられやすい。<sup>12)</sup>

そうすると、「それ」がひとまとまりの集合体を表わし、「それら」が個別化された集合体を表わすという山梨の一般化は、本稿の一般化(すなわち、(25))と(31)の一般化から導出できるといえる。<sup>13)</sup> また、もし山梨の一般化を「その+名詞」「それらの+名詞」に適用するとしたら、個体のそれぞれに焦点があてられたことを表わす表現がどうして合計を表わす表現と共起しえないのかという問題が生じることになる。

この節では、「その+名詞」と「それらの+名詞」の表わす意味を比較しながら論じる過程で、集合体を次の3つにわけることになった。すなわち、①同じ類に属す個体からなる集合体、

12) このような傾向があるからといって、別種の個体の集合体として把握されたものがひとまとまりのものとして把握できないわけではないし、同じ類に属す個体の集合体として把握されたものが個別化できないわけでもないという点は了解しておく必要がある。また、(31)で述べた傾向以外にも、次のような傾向が指摘できる。すなわち、同じ類に属す不特定多数の個体からなると把握された集合体は連続体として把握されることがあるという傾向である(Lakoff (1987: 442), 池上 (2000: 106-117))。

13) もちろん、だからといって、山梨のいう統合的スキ

ーマや離散的スキーマが必要でなくなるわけではない。集合体をひとまとまりのものとして把握するかどうか、集合体を構成するそれぞれの個体に焦点をあてて把握するかどうかというような一般的認知能力は、数量詞のグループ読み(group reading)、個別読み(individual reading)(集合的(collective)、配分的(distributive)ともいう)の区別のほか、多くの言語現象に関与している(たとえば、Nakamura (1983), 小早川 (1998), 山梨 (2000: 76-78), 池上 (2000: 93-140)などを参照)。また、このような能力は、(31)で述べたことにも関わっている。

②同じ類に属す別種の個体からなる集合体, ③異なる種に属す個体からなる集合体の3つである。このそれぞれが, ひとまとまりをなすものとして把握されたり, 個別化されたりする可能性があるのだが, 傾向としては, ①の集合体はひとまとまりをなすものとして把握されやすく, ②や③の集合体は個別化されやすいといえる。ここでは, 「その+名詞」が表わすのは①の集合体で, 「それらの+名詞」が表わすのは②の集合体であることを明らかにした。「それらの+名詞」が合計を表わす表現「5本」と共起しにくいのは, 「それらの+名詞」が②の集合体を表わすからである。

#### 4. 畳語名詞

この節では, 畳語名詞の性質を「それらの+名詞」との平行性を念頭におきながら議論する。<sup>14)</sup> まず, (32) の文に単数を表わす数詞「1本」を加えてみよう。そうすると, (33) のようになる。一般的に, 畳語名詞は複数を表わすと直感的に理解されているが, 実際, それを裏づけるように, (33b) の文は不適格である。

- (32) a. 太郎は(春の)花を買った。  
       b. 太郎は(春の)花々を買った。
- (33) a. 太郎は(春の)花を1本買った。  
       b. \*太郎は(春の)花々を1本買った。

このことから, 畳語名詞は単数は表わさないといえる。

それでは, 単に複数を表わすかというわけではなく, 「それらの+名詞」と同じように, 合計を表わす表現「5本」とは一緒に使えない。

- (34) a. 太郎は(春の)花を5本買った。  
       b. \*太郎は(春の)花々を5本買った。

(34b) の文が不適格であるという事実と2節の合計を表わす表現に関する議論を考慮に入れると次のような仮説がたてられる。

- (35) 畳語名詞は異なるカテゴリーに属す個体の集合体として把握されたものを表わす。

そして, 3節の「それらの+名詞」に関する議論をふまえて(35)の仮説に修正を加えると次のようになる。

(36) 畳語名詞は同じ類に属す別種の個体からなる集合体として把握されたものを表わす。つまり, 畳語名詞は単に異なるカテゴリーに属す個体からなる集合体として把握されたものを表わすだけでなく, それと同時に, その集合体を構成する(複数の)個体が共通の上位カテゴリーに属すものであることを表わすのである。(その共通の上位カテゴリーは畳語になる名詞によって表わされている。)たとえば, 「花々」であれば, 花という上位カテゴリーとともに, そのカテゴリーの複数の異なる下位カテゴリーの成員からなる集合体(たとえば, フリージア

14) 畳語名詞に関する個別研究としては原野(1989), 早川(1990), Regier(1998)などがある。

やマーガレットからなる集合体)を表わすのである。(より正確にいうと、「花々」は、花という上位カテゴリーを背景として、その複数の異なる下位カテゴリーとそこに属す成員を前景化する表現である。)以下では、この仮説の妥当性を検証してゆく。

(36) の見通しが正しいものであることは、次の例によって確かめられる。

- (37) a. 太郎はフリージアの花を買った。  
b. ??太郎はフリージアの花々を買った。  
c. 太郎はフリージアやマーガレット (など) の花々を買った。

(37b) の文の容認度が低いのは、同じ類の別種の個体の集合体として把握されたものを表わす疊語名詞「花々」が、「フリージア」という単一の種を表わす語によって修飾されており、意味論的整合性を欠くからである。それに対して、(37c) の文が適格なのは、「フリージアやマーガレット (など)」が、花という類 (カテゴリー) の異なる種を表わす語句だからである。このような説明は、(36) を仮定することではじめて可能となる。

(36) の仮説を裏づける証拠には次のようなものもある。

- (38) a. \*太郎は {同じ種類 / 1種類} の花々を買った。  
b. 太郎は {異なる種類 / 様々な種類 / 5種類 / 数種類} の花々を買った。

この例も (37) の例と同種のものである。(38a) の文が不適格であり、(38b) の文が適格であるという事実は、疊語名詞が同じ類の別種の個体の集合体として把握されたものを表わすと考えることにより捉えられる。(ただし、同じ類というのはあくまで背景で、異なる種というのが前景化されているという点に注意されたい。)

また、次のような対照例も証左となるであろう。

- (39) a. ?\*太郎は赤い花々を買った。  
b. 太郎は {赤や黄色 / 色とりどり} の花々を買った。

3節では、異なる色の個体は異なるカテゴリーに属すと把握される場合があると述べた。疊語名詞が同じ類の別種の個体の集合体として把握されたものを表わすのであれば、異なる色を表わす語句「赤や黄色の」「色とりどりの」によって修飾できるはずだが、実際、(39b) の文は適格と判断される。一方、(39a) の文は、通例、容認度が低いと判断される。これは、1つの色しか表わさない語 (「赤い」) が修飾語になっているからである。なお、この文を容認する母語話者も少数ながらいる。その場合に与えられる解釈は、「赤い花々」の「赤」が様々な (色相、明度、彩度の) 赤を表わすという解釈と「赤い花々」が様々な種類の赤い花を表わすという解釈である。この一見すると反例にみえる現象も、ここでの考えを支持するものとみなすことができる。

ここで、(36) の仮説の利点をあげておこう。疊語になるのは限られた名詞だけだが、ここ

での分析によると、ある種の名詞は疊語にならないと予測できる。<sup>15)</sup> 疊語名詞は、疊語になる名詞が表わすカテゴリーの複数の異なる下位カテゴリーに属す成員からなる集合体を表わすのであった。そうすると、下位カテゴリーを想起しにくい名詞は疊語になりにくいはずである。たとえば、「水」「砂」「石」で表わされるカテゴリーの下位カテゴリーは想起しにくい。したがって、そのような名詞は疊語になりにくいはずであるが、実際、次の疊語名詞は容認度が低い。

- (40) a. ?\*水々  
b. ?\*砂々  
c. ?\*石々

このように、下位カテゴリーを想起することができるか否かという観点から疊語になる名詞を特徴づけることが可能になる。

次に、1節で指摘した総称文の問題を扱おう。疊語名詞は総称文の主語としては解釈しにくいのであった。

- (41) a. 花は人の心をなごませる (ものだ)。  
b. ??花々は人の心をなごませる (ものだ)。

この事実も、疊語名詞に関するここでの見方により自然なかたちで説明できる。総称文というのは、あるカテゴリーに属す成員が等しくもっている性質について述べる文である。言い換えると、そのような性質をもっているという点では、その成員は同じもの（同じカテゴリーに属すもの）であるということを述べる文である。それに対して、疊語名詞は、同じ類に属すと把握されてはいるが、同時に、別種の個体の集合体として把握されたものを表わすため、カテゴリーの多様性を前景化する表現形式であるといえる。つまり、疊語名詞が総称文の主語になりにくいのは、総称文のもつ意味と疊語名詞のもつ意味が相容れないためである。

以上の説明の妥当性は、次の文の容認度が低いことによって確認できる。

- (42) a. ?\*様々な種類の花は人の心をなごませる (ものだ)。  
b. ?\*色々な種類の花は人の心をなごませる (ものだ)。  
c. ?\*色んな種類の花は人の心をなごませる (ものだ)。

(42) の総称文においては、「様々な種類の花」「色々な種類の花」「色んな種類の花」が主語になっているが、いずれもカテゴリーの多様性を前景化する表現形式であり、文全体としては容

15) 仁田 (1997: 110) は「疊語形を持ちうる名詞は、その種類が極めて限られており、持ちうるか否かに規則性がなく、したがって、疊語形の形成も、非生産的である」と述べている。本稿では、疊語になりうる名詞の種類は、疊語名詞という文法構文 (grammatical construction) が表わす意味により動機づけることができると考えている。また、生産性に関

しては、たとえば、飯間 (2003: 35) には、「穴々」「岡々」などの用例があげられている。このような用例を説明するためには、中心的な用法から周辺的な用法 (中心的な意味から周辺的な意味) へと拡張してゆく仕組みを明らかにすることが必要であろう。

認度が低くなっている。<sup>16)</sup> (42) の文の容認度が低いことと (41b) の文 (疊語名詞が主語の総称文) の容認度が低いことは同じ理由によるのである。

最後に、疊語名詞に関する認知言語学的観点からの先行研究にふれておきたい。唐須 (1992) や Tosu (1997) は、疊語名詞に関して次のような記述的一般化を行なっている。

(43) 基本レベルのカテゴリーを表わす名詞が疊語として使われる。

本稿の議論は、(43) の一般化に対して説明 (動機づけ) を与えるものである。ここでは、疊語名詞は同じ類に属す別種の個体の集合体として把握されたものを表わすと考えてきた。1つのカテゴリーとしてのまとまりをもちながら、同時に、その成員の多様性を最大限に許すレベルが基本レベルのカテゴリーだとすると、そのようなカテゴリーを表わす名詞が疊語名詞になるのは、疊語名詞の固有の意味と最もよく調和するからであろう。また、基本レベルのカテゴリーは、その下位カテゴリーを想起しやすいレベルである。この点でも疊語名詞のもつ意味と合致するといえる。

また、Lakoff and Johnson (1980: 127-128) は、疊語名詞には (44a) の概念メタファーが関わっていると主張している。具体的には、(44b, c) のような説明を与えている。

(44) a. MORE OF FORM IS MORE OF CONTENT

b. Reduplication applied to noun turns singular to plural or collective.

c. A noun stands for an object of a certain kind. More of the noun stands for more objects of that kind.

本稿の主張との関連で特に重要なのは (44b, c) の一般化である。この一般化では、日本語の疊語名詞が表わす多様性の意味 (すなわち、別種の個体の集合体として把握されたものを表わすという点) は捉えられない。<sup>17)</sup> 疊語名詞に (44a) のような概念メタファーがはたして本当に関与しているのか、そもそも (44a) のような概念メタファーを想定してもよいのかという問いと合わせて再考する必要がある。

16) ただし、「すべての種類の花は人の心をなごませる (ものだ)」という総称文は適格である。一見すると、この文の主語「すべての種類の花」も、(42) の文の主語と同じように、カテゴリーの多様性を前景化する表現形式であるように思われる。それにもかかわらず、これを主語とする総称文が可能であるという事実は、本稿の説明にとって問題となるかもしれない。しかしながら、ここでは、「すべて (の)」の働きに注目したい。この文における「すべて (の)」は、花という上位カテゴリーのすべての下位カテゴリーを前景化する働きをしており、結果として、上位カテゴリー全体も前景化されることになる (これにはメトニミーが関与している)。したがって、この文の主語は下位カテゴリーの多様性ととも、上位カテゴリーのまとまりを表わしているといえる。

そのため、総称文の主語として用いることができるのである。このことは、容認度の低い (41b) の文の主語に「すべての」を加えて「すべての花々は人の心をなごませる (ものだ)」とすると容認度が上がるという事実によって確認できる。同様の説明が、「あらゆる種類の花は人の心をなごませる (ものだ)」や「あらゆる花々は人の心をなごませる (ものだ)」についても可能である。

17) 池上 (2000: 168-171) においても、日本語の疊語名詞は、英語の複数の中心的な用法と同じように、「同一のカテゴリーに属する個体の集合」を表わすと論じられている。疊語名詞を特徴づけるにあたっては、同一のカテゴリーに属しはするが、別種の個体の集合体を表わすという点が重要である。

## 5. むすび

本稿では、日本語の複数表現として「それらの＋名詞」と畳語名詞をとりあげ、次の3つの問いをたてた。①「それらのペン」はどうして「5本」と共起しにくいのか。②「花々」はどうして「5本」と共起しにくいのか。③「花々」はどうして総称文の主語になりにくいのか。そして、この3つの問いに対して統一的な答えを与えることを試みてきた。「それらの＋名詞」と畳語名詞がいずれも同じ類に属す別種の個体の集合体として把握されたものを表わすと考え、この3つの問いは相互に関連するものとなり、統一的な答えを与えることが可能となる。

## 付 記

本稿は、関西言語学会第22回大会（1997年11月9日、京都大学）において「『それらの＋名詞』と畳語名詞の意味論」と題して発表した論文にもとづくものである。中右實先生、廣瀬幸生先生、古川直世先生、ロビン・ティードマン（Robyne Tiedeman）先生には発表の前後の様々な段階で大変お世話になった。また、井元秀剛、岩田彩志、江口正、岡良和、佐野まさき、田中裕司、野川健一郎、西田光一、西村義樹、長谷川葉子、森田省、和田尚明の諸氏にも有益なご助言、ご質問をいただいた。坪井栄治郎氏には最終段階の原稿に目を通していただき、あたたかい励ましのお言葉と貴重なご助言、ご指摘をいただいた。

本稿と口頭発表論文の一番の違いは次の点である。口頭発表時、そして、それ以後長い間、ここでは修正することになる（13）と（35）の一般化を正しいものと考えていた。その時点では、Wierzbicka（1988: 510-514）のcutleryやfurnitureに対する“things of different kinds”という規定との違いがはっきりしなかったが、ここでは、それぞれを（25）、（36）のように改めることにより、Wierzbickaとの相違点が明示でき、説明できるデータも増えたと思う。（さらには、ここではふれることができなかったが、「それらの＋名詞」と畳語名詞をシネクドキと分析する可能性もみえてきた。）

本稿で扱った内容は、人間環境大学人間環境学部におけるいくつかの授業でとりあげたが、その際、学生から発せられるするどい意見、質問には感服させられることが多かった。とりわけ、石川雅、鶴飼奈緒子、佐々木孝尚、芳賀申之介、三宅希代子の諸氏との授業内外での議論は常に有意義で刺激のかつ楽しいものであった。

最後になったが、『こころとことば』編集委員長の田畑洋子氏、編集幹事長の伊藤利行氏には一方ならずお世話になった。記して謝意を表する次第である。

## 参考文献

- Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.) (2000) *Usage-based models of language*. Stanford, California: CSLI Publications.
- Bateson, Gregory (1972) *Steps to an ecology of mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clark, Kenneth B. and Mamie K. Clark (1940) Skin color as a factor in racial identification of Negro preschool children. *The Journal of Social Psychology* 11: 159-169.
- Croft, William (1994) Semantic universals in classifier systems. *Word* 45: 145-171.
- Gelman, Rochel and C. R. Gallistel (1978) *The child's understanding of number*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- 原野亮子（1989）「畳語について」『九州大学留学生教育センター紀要』1：91-103。福岡：九州大学留学生教育センター。
- 早川治子（1990）「日本語の畳語名詞の意味についての一考察」*Sophia International Review* 12: 9-18. Tokyo: Sophia University International College.
- 飯間浩明（2003）『遊ぶ日本語 不思議な日本語』東京：岩波書店。

- 池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 東京：講談社。
- Kaga, Nobuhiro (1991) Humanness and the kind-level interpretation. *Tsukuba English Studies* 10: 51-67. Tsukuba, Ibaraki: Tsukuba English Linguistic Society, University of Tsukuba.
- 小早川 暁 (1998) 「空所化構文の意味論」『英語青年』144.9: 515-518. 東京：研究社出版。
- 小早川 暁 (2001) 「数を数える能力と合計を表わす文」中右実教授還暦記念論文集編集委員会 (編) 『意味と形のインターフェイス』上: 317-325. 東京：くろしお出版。
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Rafael E. Núñez (2000) *Where mathematics comes from: How the embodied mind brings mathematics into being*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar 1: Theoretical prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of cognitive grammar 2: Descriptive application*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Nakamura, Masaru (1983) A nontransformational approach to quantifier floating phenomena. In: Akira Ota, Susumu Kuno, Kinsuke Hasegawa, and Masaru Kajita (eds.) *Studies in English Linguistics* 11: 1-10. Tokyo: Asahi Press.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』 東京：大修館書店。
- 中右実 (1998) 「空間と存在の構図」中右実・西村義樹『構文と事象構造』: 1-106, 205-209. 東京：研究社出版。
- 西村義樹 (1988) 「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』: 107-203, 209-214. 東京：研究社出版。
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』 東京：くろしお出版。
- Regier, Terry (1998) Reduplication and the arbitrariness of the sign. In: Morton Ann Gernsbacher and Sharon J. Derry (eds.) *Proceedings of the Twentieth Annual Conference of the Cognitive Science Society*, 887-892. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- 唐須教光 (1992) 「言語学的説明再考—日本語の畳語を例として—」『藝文研究』60: 122-135. 東京：慶應義塾大学藝文学会。
- Tosu, Norimitsu (1997) Another explanation of reduplicated noun phrases in Japanese. In: Keiichi Yamanaka and Toshio Ohori (eds.) *The locus of meaning: Papers in honor of Yoshihiko Ikegami*, 221-225. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Wierzbicka, Anna (1988) *The semantics of grammar*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 山梨正明 (1995) 『認知文法論』 東京：ひつじ書房。
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版。
- 吉田甫 (1991) 『子どもは数をどのように理解しているのか—数えることから分数まで—』 東京：新曜社。
- 吉田甫・多鹿秀継 (1995) 『認知心理学からみた数の理解』 京都：北大路書房。

小早川 暁 人間環境大学助教授 (認知言語学)